特集

夢の途中

カナダのバンクーバーで開催された冬季五輪
男子モーグルに出場し、日本人過去最高となる
7位入賞を果たした遠藤尚（しょう）（忍建設、猪苗代高卒）
北海道で開催されたインターハイ男子大回転で優勝、
続く国体ではアルペン大回転少年男子の部で
2位に入賞した井上賢之介（けんのすけ）（猪苗代高卒）
幼いころからの夢を追いかけ続け
それを手にした2人に迫る

遠藤尚 SHO ENDO

SAJ 22 承認第 767 号

力を出し切れた五輪

カナダのバンクーバーで2月13日から3月1日まで開催された冬季五輪。本町出身の遠藤尚さん(19)＝(忍建設、猪苗代高卒　以下敬称略)は男子モーグルに出場し、日本人過去最高となる7位入賞を果たした。

初めての五輪。期待と興奮に胸を躍らせてバンクーバー入りした遠藤だったが、現地入りしたときから体の動きが悪かった。4日間の公式トレーニングはなんとかこなしたが、納得のいくものではなかった。調子が悪いとは言わないようにしていた。誰かに聞かれれば「調子はいいです。絶好調です」と答えていたが、応援に訪れた忍建設の中村忍（しのぶ）社長にはまずいですねと本音を漏らした。

「社長だから言えた。張りつめていた緊張の糸をどこかで緩めたかった。プレッシャーに潰されそうになってましたから」と遠藤は語る。

レース当日もスタートからゴールまでを通したトレーニングをしたいと思っていたが、できずに終わった。最後までそんな調子だった。

調子は悪いけど、体を動かしていけばいけるはず。予選が始まる前に気持ちを切り替え、ウォーミングアップを多めにした。これが功を奏し、心地よい緊張感の中で予選を迎えることができた。

「スタートした瞬間、よし行ける。体は動くと思いました」

第1エアの着地後、一度体の重心が後ろにいったが、慌てずに立て直すことができた。予選が終わり8位で決勝進出を決めた。

―一発やってやるぞ―と思った。

攻める気持ちを忘れずに臨んだ決勝。第1エアのDスピン（体の軸を横にずらして回転する技）では背中がつりそうになり回転が鈍ったが、高さのあるジャンプのおかげで回り切ることができた。中盤のターンを果敢に攻め、スピードを増していく。第2エアは得意のバックフリップ（後方宙返り）。滞空時間の長い大きなエアに歓声が上がった。着地もしっかりと決め、そのままゴール。25・38点をマークし、日本男子モーグル勢で史上初めてとなる五輪7位入賞を果たした。

「楽しかった。思った以上に緊張せず、力を出し切れた。オリンピックパワーです」と報道陣に語った。

今シーズンのベストに近い滑りができたと本人が話すとおり、エア点は3人のメダリストに続いて4位の5・24点。タイム点でも5位となる23秒台を叩き出し、ソチ五輪でのメダルの可能性を証明した。

4年後のソチ五輪に向けて、期待は膨らむばかりだ。

井上賢之介 KENNOSUKE INOUE

SAJ 22 承認第 772 号

念願の高校日本一へ

第59回全国高等学校スキー大会は2月2日から7日まで、北海道で開催された。

県総体の回転、大回転を制し、2冠で臨んだインターハイ。

井上賢之介さん(18)＝猪苗代高卒　以下敬称略)は男子大回転で本県男子初となる全国制覇の偉業を成し遂げた。

中学生時代から全国大会で活躍した実力は折り紙つき。いずれ全国を制すると言われ続けてきた逸材が、ついに念願を果たした。

昨年のインターハイ男子大回転は惜しくも2位。今年で最後となるインターハイに懸ける思いは強かった。

「夏場からいい練習ができていたので自信を持って臨みましたが、スタート直前までは昨年より緊張していました」

と語る井上だが、今回は練習通りの滑りができた。

1本目を滑り終えて53秒25。堂々の1位で2本目に進んだ。2本目は少し力みが出てしまったと振り返るが、焦らずに自分の滑りを貫いた。2本目を56秒27でまとめ、合計1分49秒52。2位の選手とわずか0・08秒差で念願の日本一のタイトルを手に入れた。

「念願だった全国優勝ができてうれしい。ここまでこれたのは両親、豊澤監督、後援会や応援してくれた皆さんのおかげです」

と感謝の言葉を述べた。

第65回国民体育大会（くしろサッポロ氷雪国体）は2月25日から28日まで、北海道で開催された。インターハイ男子大回転を制し、2冠をかけて臨んだアルペン大回転少年男子は、わずかなミスが明暗を分けた。

スタートから続く緩斜面から、最大斜度33度の急斜面へ入るポイントは、練習のときから気をつけないといけないと思っていた難所だった。急斜面に入る一つ手前の旗門で腰が引けてしまい、そのまま急斜面へ。わずかにラインが乱れただけだったが、ライバルにわずか0・02秒及ばず2位となった。

「ゴールしてタイムを見たら「あ、負けちゃったな」と思いましたが、自分なりに攻めていたし動けていたので、しょうがないと思います。悔しさを次につなげます」

と語った井上。

目標としていたインターハイ、国体の2冠はならなかったが、敗れてもなお強しと感じさせる滑りだった。

春からは大学スキーの強豪、早稲田大学へ進学し、インカレ制覇とソチ五輪金メダルという大きな目標を目指す。

遠藤尚の1年

地元開催だったFISフリースタイルスキー世界選手権猪苗代大会。屈辱の代表落選から1年アスリートとして、社会人として彼はどんな1年を過ごし、どんな成長を遂げたのか

昨年の3月に開催された世界選手権猪苗代大会。地元での開催ということもあって、絶対に出場したいと数年前から目標にしていた大会だった。しかし代表枠から外れ、前走を務めることになった。

「あれは本当に悔しかったですね。あんな思いはもう絶対にしたくない。前走として同じコースに入れたからまだよかったですけど、テレビで観戦とかだったら、悔しくて耐えられなかったと思います。五輪には絶対に出てやる―。と悔しさをバネに変えました。今思えば、出れなくてよかったかもしれません。もし出場して成績を残せたら、今回の五輪ももっといい結果になったという可能性もあります。でも、それは今の僕ではない気がするんです」

世界選手権猪苗代大会で2位に輝いた西伸幸（のぶゆき）選手（白馬スキーク）は、世界選手権のメダリストという選考基準をクリアして五輪代表になったが、今シーズンのW杯ではなかなか結果が出せずに苦しんでいた。

マスコミに取り上げられ、結果が出せないと書かれる厳しさを遠藤は目の当たりにしてきた。

「あれはキツかったと思います。僕ならプレッシャーで潰れていたかも。出場が決まっているからといって楽じゃないんだな。結果が出なければこう書かれるんだなと思いましたし、勉強になりました」

自分自身、昨年より注目を浴びる立場になった遠藤は、先輩たちの姿から、マスコミにどう取り上げられようと変わらないの心の強さを手に入れることが必要だと学んだ。

ＳＡＪ 22 承認第 768 号
「あれは本当に悔しかった」と遠藤が語る世界選手権猪苗代大会での前走

忍建設に入社

猪苗代高校を卒業し、忍建設に入社した遠藤は、午前中は会社の仕事をし、午後はトレーニングという生活を始めた。現場に入れてもらい、仕事全般を見て勉強をした。自分が手を出せない仕事では事前の準備を手伝うなどできることを見つけて動いた。

「現場でくぎを踏んだこともあります。思いっきり踏み抜いて靴下が真っ赤になっちゃって、うわヤバイって。あれすごく痛いんですよ。これからは安全靴を履こうと思います（笑）」

まだまだ一人前の職人というわけにはいかないようだが、仕事とトレーニングを両立させてきた。

「社長には仕事もちゃんとやるように言われていたので、両立させるためにいろいろと考えました。スキーのことや自分の将来のことも考えたりして、あの時間があったのがよかったんですね」

アスリートとして、会社の一員として自分はどうあるべきかを考えながら過ごした1年は、遠藤を人間として成長させた。

人との出会い

五輪が終わって帰国した遠藤は、調整のため長野県に向かった。長野で数日間を過ごし、それから帰国後初めて自宅のある猪苗代へ向かった。

「モーグルという競技を続けてきた中で、出会ったすべての人たち。そのうち誰か一人でも欠けていたら今回の結果は無かったかもしれないね」

移動中の車内で中村社長と話した。

現在のトレーナーに出会わなければ、今年の自分の活躍はなかったと話す遠藤。この出会いも人とのつながりからもたらされたものだった。

「中村社長の知り合いのお寿司屋さんが接骨院を紹介してくれたんです。そこで話をしたら、トレーナーさんを紹介された。人と人とのつながりってすごいなと思います。挙げたらきりがないですよ。リステルの鈴木長治（ちょうじ）相談役がチームを作ると言わなければモーグルをやってなかったし、僕がゲームにハマっていたらやっぱりモーグルをやらなかっただろうし。ヤンネ（ヤンネ・ラハテラ　ソルトレイク五輪金メダリスト、現全日本ナショナルチームコーチ）みたいなすごい人が日本のコーチになったというのも大きな出会いだと思います」

遠藤は自分の置かれている状況をF1のマシンに例えて話を続けた。

「ドライバーが僕で、スキーを教える人、体を直してくれる人、お金を提供してくれる人やスキーなどを提供してくれるメーカーの人。全部のパーツが集まって、僕が操縦する。結果が出ると僕の手柄みたいになりますけど、実際はそういうふうにかかわってくれた人がいたから」と出会ってきた人や仲間たちに感謝の気持ちを忘れない。

忍建設に入社して、仕事とトレーニングを両立してきた。スキーヤーを対象に開催した自身のモーグルキャンプでは、参加者を募るために自らスキー場に立ちビラを配った。ぜひ参加してくださいと直接声をかけた。さまざまな人と出会い、さらに人脈を広げた。

「この1年間、いろいろなことを経験できて本当に良かったです。逆にスキーだけをやれって言われていたら、ダメになっていたかもしれません。練習をやりすぎて質が低下したり、練習自体がストレスになってしまったりしたら、絶対に続かないですから」

充実した遠藤の表情は、1年間の成長を物語っていた。

初めての五輪が終わり、帰国した遠藤彼を取り巻く環境は一変していた

世界7位とは

五輪のレースが終了し、日本に帰国した遠藤を待ち構えていたのは、おびただしい数の報道陣だった。

テレビや新聞などの取材依頼が殺到したが、まだ実感がわかなかった。

「うれしいのにうれしくない。五輪で入賞、世界で7番目ですからすごいんだけど、でも7位だよ」

五輪の会場で大勢の人に祝福された時でさえ違和感を感じていた。W杯で10位になったときにはうれしさで眠れなかったが、今回はぐっすり眠れたと語る。

「いい意味で考えれば現状に満足していないということだから、よかったのかもしれません。帰国してマスコミに取り上げてもらえるのはうれしかったんですけど、これで自分が満足しちゃったら駄目だなと思っていました」

次の五輪では金メダルを―。遠藤はまだまだ満足していない。

五輪終了後、ブログの反応を見てびっくりした。見たことがないほどのメッセージがブログを埋め尽くしていた。

「勇気をもらったとか、感動したっていう書き込みは本当にうれしかったです。自分が好きでやっていることでみんなにそんな事を言ってもらえるなんて幸せだなと思いました」

携帯電話にも百件を超える祝福のメールが入っていたが、忙しすぎてすべてのメールに返事ができないのが悩みだ。

帰国後はどこのスキー場に行っても子どもたちにサインをせがまれるようになった。

「以前は僕が雄剛（ゆうごう）さんや修（おさむ）さん（附田雄剛、上野修。ともにチームリステル所属）にあこがれる子どもでした。僕が見る2人はどんな時でも格好良かった。遠藤尚はスキーをしているときはいいけど、それ以外は駄目だなんて言われたくないじゃないですか。人間として全体的に目標にされる人になりたいと思います。自分の滑りを見てスキーをやってくれるようになったらうれしいですね」

過去の少年は笑顔でそう答えた。

ＳＡＪ 22 承認第 769 号
モーグルファンを熱狂させた五輪決勝の滑り

Message

かつて遠藤尚も在籍し、五輪選手を目指して練習していたチームリステルジュニア。未来の五輪選手を目指して練習に励む後輩たちからメッセージ

●谷口岳穂（がくほ）さん（東中３年）

尚さんは、今一番追いつきたい、あこがれの先輩です。五輪の滑りは、エアがすごく高くてきれいでした。

４年後には自分も 19 歳。尚さんの滑りを見て、五輪の舞台で自分がどういう滑りをしたいかが具体的にイメージできました。絶対に五輪に出たいと思います。

●谷口綺穂（きほ）さん（東中１年）

身近な先輩の活躍に勇気をもらいました。上村愛子選手が初めて五輪に出場したのは 17 歳。わたしも４年後の五輪出場を目指します。

●渋澤元気（げんき）さん（群馬県大間々東中１年）

五輪の尚先輩は、迫力のあるかっこいい滑りでした。尚先輩と五輪が僕の目標です。

左から渋澤さん、谷口綺穂さん、岳穂さん

Sho Endo

ひさびさに戻った自宅
遠藤が語る感謝の言葉と今後の抱負

ＳＡＪ 22 承認第 770 号

五輪のゼッケンと表彰状を家族に見せて報告する遠藤。
父省吾さん（右）は「ソチ五輪に出場できたら現地に応援に行きます」と語り、母由喜子さん（中央）は「わたしはテレビで観戦します。4年後、またあんなにドキドキするのかと思うとぞっとする」と笑った。

感謝

「ほっとした」

遠藤が帰国後初めて家について述べた感想だった。

父省吾さん、母由喜子さんと愛犬のゴンちゃんは「お疲れさま」と笑顔で出迎えた。レースをテレビで観戦した省吾さんは

「とにかく一本通してくれればと思っていた。スピードが出ていたので心配したがいい滑りだった」

由喜子さんは

「テレビを見ながら口から心臓が飛び出そうなほど緊張した。自分の子じゃないみたいな滑りだった」と息子の労をねぎらった。

「子どものころから勉強しろとは一言も言わず、伸び伸びとスキーをさせてもらった。自由に育ててくれて感謝しています」と遠藤は感謝の言葉を述べた。

五輪期間中、寄せ書きをしてもらった日の丸の旗を選手村の部屋に広げておいた。日の丸の真ん中には―夢は見るものではなく叶えるものだ　10代の集大成をつかんでやれ―と書かれた中村社長のメッセージ。社長の本気が伝わった。みんなに応援してもらっている。やってやるという気持ちが固まったと言う。

取材中、中村社長とその家族、忍建設の社員、チームリステル、スキー連盟や今まで支えてくれた多くの人たちに対して、遠藤の感謝の言葉は尽きることがなかった。

遠藤に4年後のソチ五輪について尋ねると、

「4年後の五輪は、スピードと正確さを競う戦いになると思います。しっかりとトレーニングを積んで、ピークを持っていきたいです。今年は体力面などの基礎的なトレーニングをこなして体を作っていきます。エアは難易度を上げるので、4年かけてじっくりと取り組みます。目標はもちろん金メダルです」と力強く語った。

遠藤の所属先
（株）忍建設
中村忍社長

ＳＡＪ 22 承認第 771 号

Profile　えんどう・しょう
忍建設スキー部所属
猪苗代町渋谷出身　猪苗代高卒
3歳からスキーを始め、小学校6年生でチームリステルジュニアに所属。本格的にモーグルを始める。猪苗代高時代から日本代表としてW杯に出場、世界を転戦する。
バンクーバー五輪で初出場初入賞の快挙を成し遂げた
1990年7月4日生まれ　178㌢、72㌔　趣味はバスフィッシング

Message

応援団の先頭で応援する鈴木長治相談役

遠藤尚がモーグルを始めるきっかけとなったチームリステルジュニアを擁するリステル猪苗代。

今回で4大会連続出場となる附田雄剛選手とゆかりのある遠藤の両選手を応援するため2月15日、「応援ライブ」を開催した。

大スクリーンの前で応援団の先頭に立ち、両選手にエールを送った鈴木長治相談役は「遠藤はよくやった。後輩の励みになる」とチームリステルジュニア1期生を褒めたたえた。また17位の附田選手については「リーダーシップを発揮して選手たちを引っ張ってくれた」と労をねぎらった。

井上賢之介の3年

中学時代から全国大会に出場
県スキー界で屈指の逸材として注目されてきた井上
スキーをするために最高の環境を―。
そう願って進学した猪苗代高校で一体何を手に入れたのか

猪高での生活

中学生のころから猪苗代高校に進学したいと思っていた。県外の高校からも誘われたが、学校よりも環境が大事と父裕明さんと話し合った。

「僕はこの町で育ったし、十分な練習場所がある。自分の住み慣れたところで、落ち着いて過ごせたほうがこれからの自分のためになるだろうと思っていました」

この学校で生活できてよかった。3年間の高校生活を終え、井上は心からそう思っている。

高校生活は、部活動を中心に回っていた。一生懸命練習をする部員ばかりだったので、やっぱりこの学校を選んで良かったと思った。夏場のつらいトレーニング。一緒に頑張った部員たちは何ものにも代えがたい親友だ。競技は違うがお互いに高めあえる仲間もいた。これからも刺激しあって頑張っていきたいと井上は思っている。

冬の遠征期間、堂々とスキーをするためにも、勉強と両立させ、人間的にもしっかりしなければいけない。服装、生活態度やあいさつなど、日常生活にも気を配り、常に厳しい目で見られているという意識を持っていた。正直、苦しいと思う時期があったことも事実だ。

「でも、スキーだけやっていればいいと思ったことは一度もないです。冬場はほとんど学校にいない分、夏場は競技に対する姿勢や普通の高校生であるという謙虚な気持ちを忘れないように生活していました」と井上は話す。

同校の新田銀一校長によれば、スキー部の生徒たちは模範生。冬期間になり、学校を休みがちでもテストでは学年の上位に名を連ねるという。

「高校生活の思い出は、やはり3年のインターハイ。インターハイに照準を合わせてやってきたので、そこで結果を出せたというのはうれしいですし、自信につながりました。スタートの瞬間、独特の緊張感というかドキドキしていたことが印象に残っています」

念願の日本一を手にしたときの話になると自然と笑みがこぼれた。

「スキー以外では、修学旅行も楽しかったです。どこに行ったからというのではなく、友だちと普通に話をして、ゆっくりできたことが楽しかったですね」

学校で友人たちと過ごす時間は楽しかった。リラックスできる場所だったと語る井上。

町の環境、後援会、同窓会を含めた猪苗代高校のサポートや友人たちに恵まれ、自分の選択は間違っていなかったと改めて感じた。

恩師、豊澤監督の下を離れ 大学スキー界の強豪、早大スキー部へ 井上が語る期待と抱負

豊澤監督

井上が2年生のときから指導に当たっている猪苗代高スキー部の豊澤徹也監督。猪高スキー部のOBでもある豊澤監督は、現役時代の経験から、井上に朝の自転車トレーニングを勧めた。豊澤監督と話し合い、与えられた課題をこなすうちに、自分に何が足りないかを考える自主性が身についたと井上は言う。

「課題一つをきっかけにして、じゃあ放課後はこれもやろうとか、いろいろと考えるようになりました」

夏場のトレーニングは内容が充実し、徹底的にいじめ抜かれた体は、以前と比べて一回りも二回りも大きくなった。全国制覇への土台はこうして培われていった。

猪苗代高スキー部
豊澤徹也監督

「豊澤監督は服装も僕たちに近いし、普通の先生というよりお兄さんという感じです。精神面のサポートだけでなく、生活面とかも厳しい目でいろいろと注意してくれました」

井上らスキー部員の生活態度や周囲への感謝を忘れない謙虚な姿勢は、豊澤監督の熱心な指導によるところが大きい。井上が2年生のときに後援会から補助が出ていることを聞いたのも豊澤監督からだった。自分1人の力ではない。支えてくれる皆さんに感謝する気持ちを忘れてはいけないという豊澤監督の言葉は、井上だけでなく猪高スキー部全員の心に浸透している。

インターハイで優勝した井上がまず感謝の言葉を口にしたのがそれを物語っていた。

早大での抱負

春からは早稲田大学に進み、スキー部員としてトレーニングを積む。

「早稲田大学スキー部は人数の少ない部ですが、少人数であるがゆえにコーチの目が行き届くとか、より深いきずなができることによって、お互いが切磋琢磨していけるといったメリットがあると思います」と話す。

ＳＡＪ 22 承認第 774 号　第 59 回全国高等学校スキー大会男子大回転で初優勝　県勢初の快挙となった

Interview

インターハイを会場で観戦し、息子の快挙を見届けた父、井上裕明さんに感想を伺った。

１本目は別人じゃないかと思うような滑りでした。雪温が低すぎてワックスがきかないような状況の中、実力を出し切れたと思います。

２位から１位へというのは簡単なようで実は難しい。プレッシャーはあったと思いますが、あの場所でああいう滑りができたというのは、さらにメンタル面が強くなった証拠だと思います。

0.08 秒で明暗を分けるすごさを家族も実感しました。体調管理も去年以上に気を使っていたと思います。今年はスキーができること、練習ができることに感謝しながら競技に臨んでいたようで、人間的にも少し成長したのかなと思います。

優勝という成績におごらず、謙虚な気持ちでいろいろな人からのアドバイスやサポートを受けられるようにしてください。

こういう成績が残せたのも新田校長先生、豊澤先生や猪苗代高校スキー部のチームワークが良かったおかげだと思います。本当にありがとうございました。

井上裕明さん

今よりもっといいトレーニングをして、自分を成長させることができると思ったのが早大スキー部を選んだ理由と話す井上に、具体的にどんなことに取り組んでいくかを聞いてみた。

「高校時代のトレーニングで少しはビルドアップできましたが、まだまだ体は小さいほうなので、大学では科学的なデータを生かしたトレーニングで体を大きくしていきたいです。専門的な知識を持っている人もいると思うので、そういう人とのコミュニケーションを大切にして自分の競技に生かしたい。大回転については、自分でも感覚的につかんできているものがあるので、その感覚を忘れずに向上させたい。回転については、重心を置くポジションとか大回転とは違う部分を自分の感覚としてしっかり残せるようにこれからやっていこうと思います」

井上の目標はもうしっかりと定まっている。

日本では回転系で活躍する選手が多いが、大回転で活躍する選手というのは世界的に見ても少ない。井上は大回転で活躍できる選手になろうとしている。

「自分がこれからどんな競技生活を送っていくのか、どれだけ成長できるのかが楽しみです。大学４年間のうちに必ずナショナルチーム入りを果たし、W杯や世界選手権を転戦して、少しでもいい条件でオリンピックに出場できるようにしたいと思います」と決意を語った。

高校３年間で豊澤監督に教わったことが自分のベースになっている。それを忘れずに成長していきたいと井上は語る。

「強い選手になって人間が変わってしまったりしないように気をつけたい。いつまでも謙虚で、周りの人たちに対する感謝の気持ちを忘れず、日々努力をしていきたい。インカレで結果を残すこととソチ五輪出場を目指して頑張ります」とさわやかな笑顔を見せた。

ＳＡＪ 22 承認第 775 号

Profile　いのうえ・けんのすけ
猪苗代町祢次出身　猪苗代高卒
2 歳からスキーを始め、いろいろなスポーツを経験しスキーの道へ
第 44 回全国中学校スキー大会男子大回転５位
第 59 回インターハイ男子大回転優勝、第 65 回国体アルペン大回転少年男子２位
1991 年 5 月 27 日生まれ　173㌢、70㌔　趣味はスポーツ全般、特技はインラインスケート

Message

井上の父裕明さんが代表を務めるフォーチュンスポーツ少年団。井上自身も在籍しポール練習などに汗を流していた。未就学児から高校生まで約 40 人がレースを目標にスキーに取り組んでいる。

井上にあこがれ、第二の井上賢之介、未来の五輪選手を目指す子どもたちからメッセージ

●渡部穂高くん（長瀬小６年）

井上くんは猪苗代を代表する先輩。インターハイで優勝したりして、すごいと思います。僕も将来は五輪出場を目指します。

●渡部大輝くん（長瀬小４年）

井上くんはあこがれの先輩です。井上くんみたいになれるようにスキーを頑張りたいと思います。

フォーチュンスポーツ少年団の皆さん

2人の若武者は新たなステージへ飛び出した

バンクーバー五輪決勝の第２エア。
そのまま夜の闇へ吸い込まれてしまうのではないかと
心配してしまうほど大きなバックフリップは、
日本のモーグル界を応援するすべての人の夢を乗せ、
バンクーバーの夜空に弧を描いた。

取材を終えて

猪苗代のスキー界だけではない。福島の、いや日本のスキー界に光明をもたらした2人の選手。2人をここまで成長させたものは一体何だろうか。2人が揃って感謝を口にするように、周囲の人たちの支えは必要だ。猪苗代という古里もスキーをするにはもってこいの環境だろう。

しかし、それだけではこんなに素晴らしい成績を収めることはできない。

彼らは夢を追い続けることをやめなかった。ただ漠然と練習をするのではなく、夢を夢のままで終わらせないよう、絶対にあきらめない強い気持ちでトレーニングを続けてきた。その努力が実を結び、今回の結果につながったのだろう。

「辛い」トレーニングをあきらめずに続けることで、何か「一」つでも得ることができたならそれは「幸せ」になる。反対に幸せにおぼれ、何か一つでもサボってしまえば辛い結果が待っている。

２人はまだ夢の途中。目指す目標に向かうには、さらなる成績が求められるし、もちろん本人たちも満足してはいない。これからも夢に向かってさらに努力を続けていくことだろう。

夢に向かって努力を続ける若武者たちを、いつまでも応援できる町でありたいと願う。

特集　夢の途中　終わり

Photo : 青木紘二 / アフロスポーツ